



マザーとの出会い

私は1981年4月、東京で開かれた会議に出ていました。その日に帰る予定でしたが、翌日「命の尊厳を考える国際会議」があり、そこで1979年にノーベル平和賞を受賞されたマザー・テレサが講演されることを聞き、所用で出席できなくなった方の代理で聴講させて頂きました。その会場で「マザーが大阪の労務者の街『釜ヶ崎』を見たいと言ってられる。夕食会を抜け出して行かれる。同行してほしい」と言われ、新幹線でご一緒しました。東京ではマザーが行方不明で大騒ぎになったそうです。

その夜は釜ヶ崎の教会施設の小部屋で休まれ、翌日は朝5時から小雨降る中をサンダル履きで釜ヶ崎を歩き、労務者に声をかけられました。

私はマザーに「私にも何かお手伝いできることはありませんか？」と聞きました。マザーは「貴方なら私たちの活動を見れば、何をしなければいけないか、何が出来るかがわかるでしょう」とメモ用紙にMother Teresaと書き、「これを見せれば、神の愛の宣教者の者が案内してくれる」とそのサインを下さいました。

初めてのカルカッタ訪問



1981年10月、単身カルカッタ(現在のコルカタ)の「神の愛の宣教者会」を訪問しました。奇跡でした。あの超多忙なマザーがおられたのです。そしてとても喜んで下さり「今日から私と一緒に施設を回しましょう」と言って下さいました。私は初

めでのカルカッタ訪問でマザーの虜になりました。

その年から2009年末までにカルカッタを8回訪問し、その内4回もお会いでき、お話をお聞きすることができました。本日はその中で感動したことをお話したいと思います。

神の愛の宣教者会に来るシスターにマザーはおっしゃいます。「天職と職業を取り違える人が多い。職業は生活の糧を得るためのもの。天職は神様が与えて下さるもの。『日光と肥料、水を与えて育てなければならぬ』。愛の心を込めて奉仕をしようと思うならここに居ても良いが、そうでなければ今す

ぐに帰りなさい」と言われました。

どれだけ愛の心を込められるか

「人は貧しさを体験しなければ、本当の奉仕は出来ない」、「裸の人に衣服を着せる時は、人間としての尊厳を着せてあげましょう」、「人から声を掛けられない、話し相手がいないほど寂しい事はない」ともおっしゃいました。

「常に愛の心を忘れてはいけません。どれだけ与えるかではなく、どれだけ愛の心を込められるかが大切」といって、マザー自身が実践しておられました。

マザーは自分の目の前にいる困っている人をそのまま放っておけない人でした。他人の目には無駄な苦労と映ろうとも、一滴の水が大海を造るのだと信じておられたのだと思います。

私はマザーとの出会いの中で思いやりの心を持って声を掛けることが、奉仕をする者の基本だと教えられました。

ここからはカルカッタの施設を回って見聞したことをお話したいと思います。

神の愛の宣教者会

マザーは神の愛の宣教者会に来るシスターに「皆さんは神様の愛を伝える人々です。人を助け、世話をする熱意の無い人は今すぐ故郷へ帰りなさい」と言われました。そして「皆さん一人ひとりが『神の愛の宣教者』であることを忘れてはいけません」と話されます。

シスターは朝の5時から夜の9時まで休日無く働きます。持ち物は聖書、小さなバケツ、質素な白のサリー2枚だけ。勿論、洗濯機もクーラーも無い生活をしています。貧しさを理解するためには、貧しさを知る必要があるからです。

朝の礼拝でマザー・テレサが祈られるうしろ姿に、シスターたちは惹きつけられ、そこから何かを学ぼうとしているように見えました。

死を待つ人の家

初めてのカルカッタ訪問でマザーと町に出たとき、道端で横たわっている男の人を見つけて声を掛けました。犬に咬まれたような傷口は化膿し、うじ虫がたかり、何ともいえない悪臭を放っていました。直ぐにワゴン車に乗せて「死を待つ人の家」に連れて帰り、シャワーで身体を洗い、虫を取り去り、傷口の治療をします。

シスターが大学ノートを片手に大きな声で「お名前は、宗教は」と問いかけますが反応はありません。その人が生きた証しを書き取り、死後、その人の信じた宗教で葬ってあげるためです。

暫らくしてベットの上で目を開けた男の人は小さな声で言いました。「なぜ私のような者に、こんな親切をしてくれるのか」と。マザーは「あなたを愛しているからよ」と言われました。男の人はマザーの手をしっかりと握ったまま離そうとはせず、マザーの目をじっと見つめたまま息を引き取りました。「毎日のように繰り返されていることなのよ」とシスターが話してくれました。

イスラム教徒にはコーランを読んであげ、ヒンズー教徒の人にはガンジス川の聖なる水を与え、人としての最後の儀式を、尊厳を持ってしてあげるのです。

孤児たちの家

3回目のカルカッタ訪問の時、この施設で4日間ボランティアをしました。

「子供が多く育てられなくなった」といって涙を流し乳飲み子を置いていく母親。両親に連れられて来たカルカッタの町の中で捨てられた6歳の男の子。生後間もなくゴミ箱に捨てられた子供たちで施設はいつも一杯です。親の顔を一度も見たことがない子も沢山います。

この孤児たちの家で私は思わず涙がでそうになる体験をしました。前日に収容された4歳のやせ細った男の子を膝の上にさせパンをあげていた時のことです。その子はパンを小さく千切って一つひとつゆっくりと口に運びます。「沢山あるからもっと一杯食べなさい」と言っても聞きません。そして1時間ほど経ったときやっと口を利きました。「早く食べてしまおうとまたお腹が空いてしまうから」と。

孤児たちの家の子供たちは元気になると、しっかりと身元調査した里親のもとに引き取られていきます。

ハンセン病患者の家（平和の村）

この家でマザーに言われました。「eizo、人々に食べられない飢えがあるように、大きな国にも思いやりや、愛情を求める激しい飢えが必ずある。誰からも愛されず、愛することもできず、自分が必要とされていないという心の痛み。これこそが人にとって最も辛いことであり本当の飢えなのよ」と。

この家を訪れた私を歓迎するように患者さんが握

手を求めて右手を差し出されました。ハンセン病独特の症状があるその手を見て、私は思わず出しかけた手を引っ込めました。マザーを見ると目が笑っていました。

日本に帰ってハンセン病を勉強し、3年後に訪問をした時は、ためらう事なく手を差し出せたことを思い出します。

最後に

マザーはまわりの意見に流され、自分の信念を曲げるようなことはない人でした。支援してくれる上流階級の人々に嫌われても平気だったようです。

それがマザー・テレサの強さであり誇りでもあったと思います。

私たちも口だけでなく周りを見回し、身近なすぐ出来る奉仕を愛の心を込めて始めようではありませんか。

ご清聴有難うございました。

(和歌山クラブ:2010年9月例会卓話)

